The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂学の研究
Author(s)	陶, 徳民
Citation	大阪大学, 1991, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37254
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	陶(とう)　徳(とく)　民(みん)
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	第　9625　号
学位授与の日付	平成3年3月26日
学位授与の要件	文学研究科　史学専攻 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**懐徳堂学の研究**
論文審査委員	(主査) 教授　脇田　修 (副査) 教授　子安　宣邦　教授　加地　伸行

論文内容の要旨

本論文は，18世紀，大坂において設立され，近世を通じて存続した儒学の学問所懐徳堂の学問・思想を対象としたものである。全体は序論・本論5章15節と結語よりなり，860枚（400字詰）をこえる大作である。

序論「懐徳堂をめぐる研究史と問題点」においては，明治末期以来の研究史を一応学芸史的研究と思想史的研究にわかって概観し，とくに問題意識の変遷過程を中心に追究している。ここから，まず懐徳堂の研究においては，師より弟子である中井竹山・履軒あるいは山片蟠桃が取り上げられてきた傾向があり，なかでも懐徳堂の学問的基礎を固めた五井蘭洲についての研究は，その重要性が叫ばれているにもかかわらず，著述の多くについて，本格的な分析がなされていないのが現状であると述べている。ついでに近世儒学史における懐徳堂の位置づけが不明確であるとし，懐徳堂の学問・思想は，当時の諸学派の学説にかかわって，複雑な様相を呈しているが，その基調は明らかに朱子学であるにもかかわらず，蘭州を含む同学派の朱子学理解について検討がなされていないため，他の学派・学説との比較検討もなされず，近世儒学史における懐徳堂朱子学の位相があいまいなままであったとする。そしてこのような研究史の検討をふまえて，五井蘭洲の学説を中心に据えて，懐徳堂学を系統的・多面的に考察しようとしたと，本論文の意図を述べている。

第一章「朱子学研究」では，懐徳堂学における朱子学理解の特質を検討するため，「天人合一」・「格物窮理」・「無鬼」の諸論について考察し，その世界観・認識論の特質を論じている。第一節「天人合一」論では，蘭洲の『性理解』・『中庸首章解』などにもとづき，その基底には理気二元論があるとする。朱子の理気説については，古来，一元論と二元論の両説があるが，筆者は理気二元論として理解し，蘭洲

が理気二元論にたっていることを明らかにしている。ここではとくに象・数の概念を重視し，程明道らの説をふまえて「広ク天地ノ父母ヨリ見レハ，天下中ノ人ハ勿論，禽獣草木マテ皆同一理同一気ナリ」と述べていることを指摘する。つぎに「人道論」としての「天人合一」論では，人道の天道への依存とともに，人間の天の化育を「賛参」することを説いている。そしてこの「天人合一」論の実践的意義は汎宇宙的な儒学観の主張の核心，経世済民の抱負の支柱となり，また商業の利を容認するなど商人を含む庶民の社会的存在価値をも認め，さらに仏教などや異学・異端を批判する根拠になったとする。第二節「格物窮理」論においては，蘭洲の見解を考察したのち，その二面性について指摘している。それは自然界を含む客観界のすべてのもの，いわゆる「天下之物」の理を学問的対象として「真知実見」・「新知」および「知識増長」を追究するように指示したものである。また研究の中ではとくに経書の学習や天賦の徳性の体認を重視せよと注意する。要するに蘭洲は，客観界への窮理は知識獲得の手段として意味をもつが，究極的には心の修養すなわち天命への自覚・人倫明察の能力要請に寄与するべきものであるとしたという。そして履軒さらに蟠桃にいたって，物理・道理の非連続性や自然観の独自の意義が認識されはじめたのであった。第三節「無鬼」論においては，蟠桃が著名であるが，蘭洲が先駆的内容をもち，竹山・履軒において完成したもので，さらに寒泉の『弁怪』をも視野に入れるべきであるとする。ここでは仏教などの宗教や俗信における有鬼論や，徂徠学の鬼神観に対する反論をおこなっているが，それは朱子学の鬼神論を批判的に継承したもので，「陰陽造化の鬼神」説の実質には賛成するが，　鬼等の説は否定しているとする。これらは中国の范　の『神滅論』の論理にもとづいているが，鬼神についての論議を祭祀に限定し，鬼神を非実在的なものと据えて，祭祀の意義は奉祀者が誠敬を尽くすことにありとするものであった。

第二章では「自然学」を取りあげている。ここでは懐徳堂学派における天学，地理学，人体認識と医学思想をめぐる知見を分析して，その幅広い知的関心および実学の精神を論じている。第一節「天学」では朱子学の天文学について，とくに蔡沈の『書経集伝』の影響を述べ，また元代の授時暦の受容を説いている。また中国において西洋天文学を紹介した『天経或問』が蘭洲らによって認められていることを述べ，また麻田剛立との関係をあげて，懐徳堂学派の人々が漢学系・洋学系を含む当代の天文学の知識をもっていることを述べる。ついで宇宙構造論・日月食・彗星などの現象，暦についての所見を明らかにしたが，とくに蟠桃の『夢ノ代』に集約される懐徳堂の天文学について，その前提となる蘭洲・履軒の見解を紹介している。そしてそこにあらわれた西洋科学の重視，相対主義的思考，実用主義的態度などを論じている。第二節「地理学」では，「天下」・「万国」論を通して，かれらの世界観および西洋認識を考察している。蘭洲らは『天経或問』の地球観を受入れ，それによって中華思想を批判し，万国の平等を認識したといえる。ただその西洋文化の受容は，実学的観点からなされており，「東洋道徳・西洋芸術」の枠をこえていないとする。また懐徳堂学派には『日本輿地通志』の著書をもつ並河誠所があり，履軒・竹山らが淀川治水を論じ，蟠桃は潮汐に関する研究をおこなっていることを述べて，地理変遷の観念と実地踏査の精神を論じている。第三節「人体認識と医学思想」においては，まず人体の本質，両性と生殖，臓腑と頭脳・夢見と知覚などをめぐる懐徳堂学派の認識，および人体の本質の認識においては，蘭洲から蟠桃にいたる間に，道徳論の影響の希薄化や科学論の要素が増強される過程として

分析している。そして医学思想については古医方を重んじているが，しかし蟠桃は後藤艮山・吉益東洞のように瀉血や下痢をかけて病根への直接的治療をおこなうのは，病人の年令や体質などを考慮していないと批判する。これらの理解は朱子学の人体の本質認識とは矛盾するところもあるが，人道主義・経験主義の立場で実効重視の観点から医学をみたのであって，ここには弁証法的なものがみられると評価している。

第三章「経世論」においては，竹山と並河寒泉を中心に，懐徳堂学派の経世思想と幕藩体制とのかかわりを考察している。第一節「備荒救貧論の展開」では中井家本貫の龍野藩への竹山の献策である『社倉私議』を取り上げている。ここでは竹山が朱子の『社倉論』をまとめて，それが一揆防止作用に言及していることに注目し，それを自らの社倉論に展開している点や，また実施には始め出米を藩は借銀返済に回し，その利息としての米を貯めて，社倉の元米に充て，これを百姓の所有にする，という方式を考えている。これは「上下合体」の論理をふまえて巧妙な構想を展開している点と指摘している。またその影響は蟠桃や藩儒小西惟仲などによってひろがったことも明らかにしている。第二節「教化政策の提唱」は，竹山が明の雍正帝の『聖諭広訓』の和刻本に序を記し，これを松平定信に献上したこと，その当時の状況と内容を分析し，それをめぐって名分論がおこったことを述べる。第三節では「並河寒泉の社会政治観」において，彼の著『弁怪』を分析し，寒泉が懐徳堂の無鬼論を継承して，当時における迷信について，これを打破する論理を提唱していることと，彼の日記「居諸録」によって，大塩の乱，異国船の渡来，蝦夷地開発などへの関心を述べ，彼は佐幕的であって，明治維新に対しては違和感をもちつづけたことを明らかにしている。

第四章「徂徠学批判」においては，懐徳堂学派の荻生徂徠批判の実態と論理を考察し，その聖学観の特質を分析した。第一節「『窮理』説と聖人観をめぐって」では，「雷」と「歳差」といった自然現象に対する窮理の必然性と可能性をめぐって，徂徠の「窮理反対」論・天の「不可知」論などを批判した蘭洲・履軒の主知主義・合理主義の立場を分析する。その上で人間には自然認識の能力があるが，限界もあるため，天体の運行についてもその法則を絶えず再検討・再認識して，より精密に把握していくことが人間に課せられた使命である，という彼らの見解を述べて，それを評価している。つぎに徂徠が道は中国の古聖人が制定したものとして，その功績を強調しすぎたため，道の本源としての天の存在の意義が軽視されてしまったと批判していること，また徂徠の形式主義的礼楽観，中華崇拝思想を批判して「道」の自然性・公共性を主張したとしている。第二節「古典と古代制度について」は，まず徂徠『論語徴』の古語解釈における「偽証」および論法上の矛盾について，懐徳堂学派の反論を検討した。そして『孟子』『漢書』に記されている戦国時代の禄制・量制に対する徂徠の恣意的解釈と改竄，および三代の雅楽の実態や日本の雅楽の淵源を単純化しようとする彼の傾向について，履軒や仲基の批判を紹介した。これによって古語の意味や古代制度の多様性やその歴史的変遷について懐徳堂学派がどのように見たか検討し，とくに後世の凡人の創意・創造を積極的に評価しようとしている姿勢などを明らかにしている。第三章「音楽論」においては，富永仲基と徂徠・太宰春台の見解について考察している。先王・聖人の制作した雅楽の本質についての捉え方は，徂徠は政治的立場，仲基は人倫的立場にたっていると評すことができ，当代の音楽についても，徂徠は雅楽をのみ尊び俗楽を蔑視したが，仲基は「民間労苦

の声」を繁栄する臼歌・稲歌を評価していることを述べる。また楽器についても徂徠は雅・俗を峻別し，琴学を復古しようとするのに対して，仲基は『礼記』楽記篇と『宋史』の叙述によって「雅頌の声（の評価），声（そのもの）に在りて器に在らざるなり」としたことを述べる。

第五章「古代史観と神道批判」においては，懐徳堂学派の古代史と神道に関する見解を分析し，その国粋主義批判の立場を考察した。第一節「研究の現状と課題」では，蘭洲研究の必要性と履軒・蟠桃の古史観と神道論について触れた。第二節「蘭洲の『日本書紀』研究」をとりあげ，その『神代巻』についての解釈や，神武以降では刪正の要領や時代区分などを述べ，「怪力乱神を語らず」の態度などを分析した。第三節「蘭州の神道批判」では，三教交渉史の視点から神道批判をおこなった蘭洲の『十厄論』と，松岡文雄の『神道学則日本魂』に対する彼の批判をとりあげて考察した。前者については，古代における本格的神道の未形成と神道の雑種化・低俗化の傾向，後者では「百王一姓」論と湯武・夷斉論にしぼって分析し，それらに現れた儒教的普遍主義の理念と「大義名分」観念との緊張関係，蘭洲の公平正大な立場と，幕府本位の朝幕相互依存関係にたつ政治的主張を検討している。

結語では，懐徳堂学の性格と近世儒学史における位置を検討しているが，ここでは本論の分析をふまえて，まず懐徳堂学の朱子学について述べ，蘭洲の先駆的地位を確認したとする。つぎにその学問の特色は，朱子学の「大本」を堅持するとともに，その誤謬を批判する自由な学風をもち，自然界や実学に対する幅広い知的関心と探究の精神があるが，無鬼論を主張し，徂徠学への批判にみられるように，異学・異端には非寛容で純粋性尊重の理想主義のあることを述べている。また儒教的普遍主義理念と大義名分観念を両立させ，中華崇拝と日本主義を批判することを明らかにしている。そしてこのような懐徳堂朱子学は近世儒学史のなかでは，「非林・非山崎，一家宋学」というが，これは中村　斎と貝原益軒の伝統を継承しているが，時勢の要請に応じて，経世済民に積極的に取り組む姿勢をもっていたため，より実践的で包容力をもつ内容となっていると結んでいる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，大坂町人学問所として知られる懐徳堂の学問について，「天人合一」「格物窮理」「無鬼」などの諸論から自然観，経世論，さらには徂徠学や神道などどの関係といった主要な問題を包括的に取り上げて，その特質を明らかにしようとした力作である。

その成果は，まず先行研究をふまえた上で，これまで十分に利用されていなかった大阪大学付属図書館所蔵の懐徳堂文庫，大阪府立図書館所蔵の五井蘭洲関係文献，天理図書館所蔵の並河寒泉関係文献や国会図書館などの未刊史料を精査して分析をおこなったことである。これらは膨大な内容であるが，それを広く，検討し，紹介することによって，五井蘭洲の思想をはじめ新知見を加えたところは多い。

また最近の懐徳堂研究の進展によって，個別の論点については深められたが，このような高い水準で包括的に懐徳堂の学問の全容を明らかにしようとした研究は存在しない。もちろんそのさい本論文は概説におちいることなく，それぞれの問題について，たとえば懐徳堂と徂徠との自然観の相違については，

「雷」と「歳差」というトピックを取り上げて分析し，全体を語らせるという手法をもって，その特質を浮かび上がらせることに成功している。

さて懐徳堂学の研究として，本論文の成果といいうるのは，蘭洲の研究である。従来は中井竹山・履軒兄弟や山片蟠桃に主眼がおかれていたのに対して，本論文は蘭洲の諸文献を紹介しつつ，それが懐徳堂学の基礎をつくったものと評価し，中井兄弟らへの影響を含めて，その歴史的位置を明確にしている。たとえば第一章の分析は，蘭洲が懐徳堂学の基底をつくったとする点を理気二元論などによって説明し，「格物窮理」「無鬼」等の諸論についても先駆的役割を果たしたことなど，各章において蘭洲の業績を明らかにしている。また蘭洲とその父持軒の師中村　斎との関係についても分析しており，　斎の見解が懐徳堂の学問の前提となっていることも多くの箇所で実証し，これによって懐徳堂朱子学の流れを明らかにしている。なお最後の学主である並河寒泉についても，彼の筆録である『居諸録』をとりあげて分析しているから，本論文は，史料の少ない三宅石庵を除いて，ほぼ懐徳堂学の全体を明らかにしたといえる。もちろん個々の分析においても多くの新知見を加えているが，無鬼論などは広い視野から懐徳堂学の特色を明らかにしたものと評価できる。また筆者は中国の儒学についての素養を生かしており，朱子学においても朱子やその弟子蔡沈らの文献をもふまえて，懐徳堂学に与えた影響について述べている。

もちろん本論文には，いくかつの問題を残している。それは懐徳堂学の全体を包括的に捉えようとしたことから，史料のありかたにも規定されて，各章・各節の分析に精粗がみられることである。たとえば第二章の二，三節のように，先行研究に依拠したものや，断片的な史料紹介に終わっている部分もある。また三宅石庵についての言及がない。石庵は懐徳堂の初代学主であるが，朱子学と陽明学の折衷的見解によって「ぬえ学問」と評されるようなところがあったため意識的に除外したものと推察するが，やはりその位置づけをしてほしかったと考える。

しかし全体としていえば，本論文は懐徳堂学に関する膨大な研究を咀嚼した上で，朱子学の流れのなかで，その達成を実証的に明らかにすることに成功しており，今後の懐徳堂研究の基礎となるすぐれた研究であることは疑いない。本研究科委員会は本論文が学位請求論文として，十分に価値のあることを認定するものである。